

プノンペン中心市街地における歴史的風土地区選定の研究

2024 年 10 月 4 日作成

慶應義塾大学 政策メディア

社会人博士課程

藤澤忠盛

■背景と目的

近年カンボジアは首都プノンペンを中心に急速な人口増加と経済発展がおこり、それに伴い計画性の乏しい乱立した都市開発が行われている。その結果、都市景観の悪化、歴史的建造物の破壊、観光的資源の損失、地域・風土性等の歴史的ノスタルジー紛失など様々な問題が生まれている。驚くことにマスタープランがほぼ皆無であり、プノンペンの乱立した開発が今後も続くことで、世界の他都市との差別化は難しく、風土性の乏しい「個性のない都市」となる可能性を秘めている。経済成長による発展は望むところであるが、計画性の乏しい都市開発では魅力的な都市創成を行うことは困難を極める。この背景には現在カンボジアでは地域地区（街区規制）なるものが存在しないということが大きな要因の一つになっている。プノンペンの中心市街地における歴史や風土性を調査・研究し、「歴史的風土地区の選定」を成果として打ち出し、都市景観や観光資源の保存推進を促す。このことで歴史保存エリアと開発エリアをはっきりと分別した都市計画が生まれる。そのためにプノンペン中心市街地における歴史的風土地区選定の調査を行った。

■調査内容

A 調査：王宮、国立博物館、土着的マーケット、ショップハウス、寺院など地域・風土性や歴史的観光要素を文献・現地調査・ヒアリング調査を行った。

★最終段階 本研究:カンボジア プノンペン初の歴史的風土地区の選定

第1段階開発+第2段階歴史建築物+第3段階歴史・風土＝ 歴史的風土地区選定

B 調査：研究機関へのヒアリング助言とヒアリング調査を行った。

第1段階・第2段階・第3段階のマッピング（分別された地図）を地図上でレイヤー化（地図を重ねる）することで可視化し歴史的風土性地区と開発地区のすみわけを行う。研究協力機関の助言・ヒアリング調査・文献調査・現地調査より分析・研究し、「歴史的風土系地区」（一例として伝統的建造物群保存地区、美観地区、風致地区等）を選定する。さらにその地区を歴史保存地区として政府関連機関に進言する。これは将来的にプノンペン中心市街地における「地域地区創成」を構築するための極めて大きな基礎となる。

調査 C:日本におけるヒアリング調査を行った。

1:ロイ・レオン（元カンボジア プノンペン宗教省勤務へヒアリング調査） 2 回

2:マーク・トム(元カンボジア プノンペン都市計画局勤務)へヒアリング調査) 2 回

■期待される成果

カンボジアの文化はアンコール反映時には近隣諸国に多大な影響を与え、東南アジアの中核として担っていた。その後フランス植民地時代には「東洋のバリ」と称賛された美しい街並みが立ち並び、西洋文化も発展させながら、独自のクメール文化を保持していた。1970 年代に国家の人口約 800 万人中、約 300 万人という文化人の多くがポルポトによって虐殺された。その後おおむね 2000 年まで内戦に突入し都市は空洞化し多くの産業と文化が破壊された。その後急速な人口増加と経済発展がおこり、それに伴い計画性の乏しい乱立した都市開発が行われている。

プノンペン中心市街地における「歴史的風土地区」を研究選定し進言することで、歴史保存系の地域地区が「制度上初めて認定」される可能性を持つ。このことは都市の乱開発に歯止めをかける手法の一つとなり、都市景観の美化、歴史的建造物の保存、観光的資源の確保、地域・風土性を生かした生活スタイルやノスタルジーの継承が行える。

本研究は日本の国際文化協力として貢献し、都市の歴史・風土性を計画的に残すことによってカンボジアのアイデンティティと世界的な観光資源の確保に繋がる。さらには新興国の都市の計画的発展に貢献する為、新たな魅力的な都市が生まれる可能性を持つ。この意義は世界的に見ても極めて大きいといえる。

「ASEAN の 3 本柱」である政治・経済・文化の最も遅れている文化貢献を 21 世紀に成し得ることでアジア諸国との共存共栄を目指す。また詳細な調査結果は 2025 年日本建築学会等に発表予定。

■本研究の協力機関

王立プノンペン大学、王立藝術大学、カンボジア文化芸術省、プノンペン都市計画局、国際協力開発 JICA カンボジア事務所、国際交流基金アジアセンターカンボジア事務所、昭和女子大学 国際文化研究所等の支援のもと行った。大勢の研究協力者もあり感謝を記す。